天一国の家族体系内の家族関係

文相喜
韓国鮮文大学純潔学部教授

目次

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．天一国の意味
Ⅲ．家族体系とはなにか？
1．全体性
2．相互依存性
3．家族格位
4．投入と産出
5．フィードバック
Ⅳ．天一国家族体系内の基礎過程
1．家族構造
2．真の愛の価値
3．家族規範としての規則
4．家族機能
5．世代保存
Ⅴ．天一国家族体系内の成功的家族関係
1．成功的夫婦関係
2．子女と家族関係
3．老人と家族関係
Ⅵ．終わりに

Ⅰ．はじめに

現代社会の人間問題と社会問題を扱う多くの観点において、「家庭が文明の里程表」という考えはあくまでスローガンにすぎず、家族過程の役割は重大なことではないと考える傾向が、社会に広く共有されている。特に、公的な領域である政治・経済・軍事的思考方式の観点が、家族領域内の私的な分野の独特性と重要性を無視している。

今日における国際的論点、すなわち、貧困、失業、飢餓、戦争、軍備縮小、テロリズム、薬物乱用、インフレーション、離婚、逸脱した性問題、フリーセックス、疾病などの問題が家族領域で生じており、今後も絶え間なく続くであろう。このような問題は、家族領域的思考をより広い社会領域に拡張させることによって問題解決の糸口を見つける

ことができる。したがって、天一国時代の望ましい社会を形成するためには、社会を構成している基本単位の家族問題を解決することを最優先すべきである。
家族領域には価値、目標、選択、実行、自由意志に従った自由行為のような非決定論的な側面があるため、家族過程の研究の枠組みを新たに考慮しなければならない。非決定論によると、人には推論・評価し、優先順位を付ける能力があり、人間の思考と行動は、完全に決定されることはできない。人間の行為過程において個人の目標、信念に従った選択によって行動の実行が「…であるかもしれず、そうでないかもしれない」という部分があるからである。健康的に機能している家族は、人間の相互関係が重要であると考え、家庭の中で人間関係の形成をまず習得するようになる。したがって人間関係の形成をなす人間の行動は、一つの体系が持つ無数な要因による結果である。
本論文の目的は、天一国家族体系のなかで家族関係が習得すべき伝統の特性を理解して、発展的な家族体系の家族関係を模索し、世界平和の礎である家族関係のモデルを提示することである。家族体系のなかで家族関係を形成する多様な変因の中に家族の構造、家族の価値観、家族の規則、家族の機能、家族の世代保存に焦点を合わせて家族過程の基礎を理解し、家族関係の均衡をなす天一国家族関係の望ましいモデルを考察してみることにする。

Ⅱ．天一国の意味

天一国とは、天宙平和統一王国の略字である。天一国とは神様を中心とした二人が一つになる国を意味する。天の字を解いて書くと二人である。天一国とは、Aという個人が、内なる人（霊人体）と外なる人（肉身）の二人から構成されていて、この二人が調和・和合・統一をなす国を意味する。個人の構成員から形成された家庭では、神様を中心として夫婦、すなわち、二人が調和・和合・統一を成し、兄弟姉妹がひとつとなって、父母と子女が調和・和合・統一をなした家族関係を形成することを言う。さらに、共同体では神様を中心として二つの共同体が調和・和合・統一され、氏族が互いに一つになり、国家が一つになり、世界は天宙と調和・和合・統一がなされる統一王国を意味する。二人が一つになるためには中心と基準がなければならないが、その中心は神様で　あり、基準は神様の「真の愛と真理（天法）」である。２）
天一国と命名して出発させた主人公は、文鮮明先生であられる。３）天一国は、神様が直接統治されて、直接主管される国なので神様の王権が樹立されてこそ可能な王国である。神様の王権は、無形実体の霊界において神様が自らを奉ることはできず、対象格にある地上において神様の王権を奉献しなければならない。歴史の法則である蕩減法則によって、地上世界で人間先祖アダムが　　堕落して神様の王権を失ったために、罪を犯した人間が罪の蕩減を払うという蕩減原則に従って、最初のアダムに代わって、この地へいらっしゃった、後のアダムであるイエス様が、神様の王権を樹立されなければならなかった。しかしユダヤ民族がイエス様を惨刑に陥れて、神様の王権樹立に失敗したの

で、第3アダムである文鮮明先生と夫人の韓鶴子女史が人類の真の父母としてこられて、実体の横的な真の父母として、無形の縦的な真の父母である「神様の王権」を 2001 年 1 月 13 日に奉献されたのである。 4）文鮮明先生と韓鶴子女史が真の父母の位置にあられるという事実は、すでに全世界 185 ヶ国にあまねく明らかにされたことであり、歴史を通して検証されている。このような基盤の上に、人類の真の父母として神様の王権を樹立されたのであった。

天一国とは、神様主権の国家として、神様が直接統治されるところの、縦的真の父母であられる神様の王国なので、横的真の父母であられる平和の王が直接統治される永遠なる王国である。天一国の国土はこの地球星であり、天一国の国民は、人種、宗教、国境、文化を超越した世界のすべての人類であり、交叉・交替祝福に参加した善男善女たちである。交叉・交替祝福とは、全人類の家庭たちが祝福結婚式に参与することにより、神様の血統と接木され、真の家庭を樹立するようになるのであるが、祝福結婚式は真の父母によってなされ得る。

これと関連し文鮮明先生は、「統一教会の国際祝福結婚式は、私がこの期間に共に進行しなければならない行事である。この祝福式を通して人類は原罪をきれいに清算して神様の真の愛、真の生命、真の血統を回復するようになる」と証言された。 5）したがって、文先生の教えは、人類の復帰は祝福結婚に参与することによって、神様の創造本然の理想を回復することを明らかにしたのである。しかし祝福は純潔な人生の始まりに過ぎない。祝福を受けたすべての家庭は、純潔の基準を維持し、子女たちと隣人を教育することにより、子孫たちを通して神様の純潔な血統が継承されなければならない。

純潔な人生は、堕落とは関係なく創造本然の神様の理想に従って生きることを意味する。言いかえれば、三大祝福を完成することである。 6）個性完成を通じ祝福を受け、夫婦愛を通じて、喜ばしく楽しい人生において幸福な家庭を形成し、万物を愛で主管することを言う。また、創造性を持ってすべての自然と人間社会に寄与する愛の主管を持続することを言う。結局、祝福式はこのような過程を始める鍵（key）だといえる。純潔の重要性を理解せずには、人間は簡単に、正しく行くべき道を失い、性の誘惑にはまっていくことになる。

文鮮明先生は、純潔に対する教えにおいて具体的で熱情的である。彼は　　しばしば純潔と貞節の必要性を強調しながら性器官に対して明確に説明している。「フリーセックスは永遠の死を招く。姦淫は、単に個人の破滅だけでなく家族と一族そして自然破壊までもたらすことになる。フリーセックスは利己的な思考と行動なので、このような利己的な行動を簡単に出来る人は、自然破壊まで躊躇しないからである。人の性器官は、たった一人の配偶者による一つの鍵でのみ開くようになっている。たとえどんな状況であったとしても、別の鍵（マスターキー）があってはならない」と説き明かすことで、純潔の徳目を具現する絶対「性」（absolute sexuality）を強調している。 7）

しかしながら現代社会は、急進的にこの純潔な人生とは全く異なる方向に流れていって

いる。家庭連合（世界平和統一家庭連合）の一員として誕生した子女たちを含め、若者たちは絶えず婚外の性的誘惑にさらされている。彼らは、多様な人生の形態と価値観により、多様な人生の領域を提供する環境の中で、彼ら自身の人生の道を選択しなければならない。実際に祝福結婚を行うようになった父母にとって、子女たちが純潔な人生を選択して生きていくかに関するいかなる保証もない。そのため文鮮明先生は、純潔な人生を生きようと努力している彼らを守るために、多くの機関を設立された。その中でも鮮文大学の純潔大学は、純潔な人生を生き抜くための一連の過程と努力を傾けていくうえで必ず必要な大学である。純潔学科の具体的な教科課程は、文先生の教えと方向性に基づいてなされている。
天一国とは、縦的な神様と横的な真のご父母様が直接統治する神様の王国である。天一国の国民は、純潔な人生において体と心を和合・統一し、人格が成熟した善男善女が交叉・交替祝福結婚を通して神様の真の愛を中心とした真の家族関係を形成することで互いに喜び幸福な人生を生きる真の家庭である。天一国の国土は人種、文化、国境を超越した地球村である。

Ⅲ．家族体系とはなにか

体系（system）という用語は、組織化された要素の中に現れる定期的で　　持続的なパターンをいう。家族体系とは、家族の構成員内で個人が持続的、　　連続的に他の家族構成員と相互作用する過程におけるパターンを意味する。　例えば「父母は子女たちを訓育するとき、神様に仕えるかのように子女を訓育しなければならない」という家族のための規範・規則があるのなら、この規範・規則が家族間の相互作用を左右するために家族過程で一つのパターンを作り出す。このような規範・規則は、家族体系で重要な基本的な体系要素である。家族体系をもう少し具体的に理解するために、全体性、相互依存性、格位としての家族体系、投入と産出、フィードバックの基本的体系要素の意味をしっかりと理解しなければならない。

1．全体性

家族体系において、家族は、構成員がおのおの個性真理体として独特性を持っているのはもちろんであるが、家族それ自体、連体的関係を持った独特性を帯びている。家族の全体性は、各家族構成員を合わせたもの以上の意味を持っている。「全体は部分の合体以上である」という言葉が、全体性として表される家族の全体的側面を説明してくれる。例えば、交響楽団は、各演奏者と　　楽器が合わさり、各楽器の音を単純に集めたもの以上の独特の特性を持っている。このように家族体系は家族の構成員の個々人が単純に集まった構成体ではなく、家族全体の連体関係としての、統合され、一貫した総体的な相互作用過程が現れるものである。例えば、祝福結婚をした祖父母、父母そして三人の子女が共に暮らしている金氏の家の長男が留学に旅立ち現在六人の家族が住んでいる

として、この家を訪問する際、「長男が不在の家」ではなく、あくまで「祝福家庭である金氏の家族」を訪問するのである。金氏の家族は、長男が現在実家に住んでいなかったとしても金氏の家族全体としての独特性を持っている。したがって、家族体系内で全体性の相互作用過程を理解しなければならない。

2. 相互依存性

家族体系において、「祝福家庭である金氏の家族」の例は、相互依存性の特性を見せている。家族の役割定義は他の人の存在によるものである。どこの誰も子女なしに父母になれず、妻なしに夫になれず、姉、兄なしには弟や妹になることはできない。父母は子女を先有条件として父母として存在することができ、男性は女性を先有条件として、女性は男性を先有条件として、子女は父母を先有条件として存在するためである。規定された位置にいる人々が、どのように行動するのかは、家族構成員たちの持続的な行動と反応、知覚、解釈の純粋な結果といえる。

また、ある一人の家族成員の行動は、他の家族成員の過去と現在の行動に影響を及ぼす。仮に一人の家族成員に事件が発生したとすると、他の家族成員たちも変化を経験することになる。金氏家族の長男が留学を終え帰国した後、留学の目的を果たすそうと望んでいた職業に就業すれば、その家族成員たちは喜びを共に分かち合うようになるが、彼が望んでいた職に就くことができずに苦労しているとすれば、家族成員が皆、苦痛を感じるようになるのである。

3. 家族格位

一つの家族体系の中に、祖父、祖母、父、母、子女がいるとき、父母（夫婦）にとっては、祖父、祖母は上位体系であり、子女は下位体系である。家族体系は、家族の環境のなかで多様な上位体系と下位体系の中で相互作用するようになる。祖父母は過去を代表する立場として、夫婦は現在を代表する立場で、子女たちは未来を代表する立場で各自の格位を守ることになる。そのような中で祖父母は子女たちに上から下への愛を施し、夫婦関係や兄弟姉妹関係では横的な愛を、子女たちは父母や祖父母に下から上への愛を捧げることによって家族体系内で相互作用するようになるとき、その中心の席には神様が臨在されるようになる。このように家族体系内では神様の愛が核となって、各格位に合った愛の相互作用が繰り広げられることによって、家族体系内で家族関係の球形作用が成し遂げられるのである。

万一、家族体系内の中心に神様がいらっしゃらなければ、その場は自動的に自己中心的な家族関係が形成されるようになる。自己中心的で利己的な家族関係が形成されるようになれば、格位としての家族体系が無視される傾向になり、家族体系が崩れるようになる。このような家族関係は愛の球形運動が崩れるようになる。すなわち、家族関係において愛の方向が各自、自己中心的であり利己的な方向に作用することにより、家族関係

において愛の秩序が崩れるようになり、家族関係の逆機能が発生するようになる。家族体系内で神様を中心とした格位としての家族関係が無視されるならば、その家族関係はいずれ破局を招くようになるのである。

4．投入と産出

投入（inputs）は体系の中へ入って行くことであり、産出（outputs）は体系が作り出されることである。家族体系内の投入は、真の愛、時間、エネルギー、意志疎通、金銭、情報、理解、寛容、教育、養育、支援、空間などがある。家族体系内から出てくる産出の中には真の愛、受容、安定、紐帯、暖かく穏やかな雰囲気、理解、意味感、人生の目的、学び、親密性、信頼感などがある。ところが不幸にも人間始祖の堕落により、今日の家族体系内では投入と産出において好ましからざる内容があまりにも多い。憎しみ、搾取、感情的傷、憤怒、疑惑、支配、責任転嫁、力の乱用などが投入となれば、そのような種類の痛みと苦痛、悲しみが産出となる。家族体系内での力の投入は、小さい力の産出として出てくるが、真の愛の投入は、より大きい真の愛の産出としてあらわれるようになる。

5．フィードバック

フィードバック（feedback）は、家族体系の変形過程を見つめながら、家族体系内で許された基準のなかで家族関係が成立するのか認識するために、産出を評価する過程である。家族体系は絶えずこの過程を点検する。父母は子女が純潔な人生を送っているか、祈祷生活をしているか、円満な友人関係を築いているか、自分の行動に最善を尽くしているか、仲違いをしていないか、何を食べているか、宿題はきちんとしているか、ピアノの練習をきちんとしているか、充分な休息を取っているか、身なりを清潔にしているかなどに関心を傾け世話をし、確認する。

また、家族成員が効率的に時間を使っているか、来客をよく接待しているか、信仰的な雰囲気を維持しているか、訓読会（み言葉を読むこと）をしっかり行っているか、天一国家族の伝統をよく守っているか、家族や隣人に対する責任感を持って行動しているかということを点検する。家族体系内には、多くのフィードバックが日常化されていて、自動的に作動し、つねに数多くの変形過程と結果を生んでいる。家族生活が正常的なパターンで行われる限り、特別な注意を要するフィードバックを要しない。しかし家族内の深刻な問題が生じた場合には、家族体系が「成長」の方へ向かうのか、「混乱」の方へ行くのか知るためにフィードバックに注意を要する評価をしなければならない。

Ⅳ．天一国家族体系内の基礎過程

天一国の家族体系は、家族関係の全体性、相互依存性、格位、投入と産出、そしてフィードバックの５種類の要素が定期的で持続的に作用しながら、家族体系の基本パターン

をなすようになる。家族体系の基本パターンとは、なくてはならない原理的な基本形として家族体系をなす必須要素である。天一国の望ましい家族関係を形成するためには家族体系の基本パターンを土台にして、家族関係を形成する過程が必須要素として作用するようになる。その過程は家族構造、家族愛の価値観、家族規範としての規則、家族の機能、世代保存などの要素によって、家族関係の質的な変化をもたらすようにする。家族体系内の基礎過程で各要素が家族関係の質的変化にいかなる役割をしているのか、その要素に対して調べなければならない。

1．家族構造

家族は、生活共同体として自体の存続のための家族成員どうし協力関係を築き、規模と形態を維持するようになる。我が国の伝統的で理想的な家族構造は出生家族または生殖家族として集まった直系家族であったし、3 代が一つの家族関係を形成して生きる家族の形態であった。出生家族とは、親子関係や兄弟姉妹関係のような血縁関係であり、生殖家族とは、出生家族から成長して結婚することで新しい家族関係の形成をいう。９）出生家族と生殖家族の直系家族が共に集まって 3 代が調和して生きる家族構造、すなわち、祖父母、父母、子女などを含む家族を拡大家族の形態という。産業化を経て、拡大家族の家族構造形態は次第に消え、出生家族と生殖家族が分離され、父母、子女だけで構成された核家族を形成するようになった。ここからさらに血縁関係を離れ、家族の機能によって集まって生きる多様な家族形態が形成された。１０）このような多様な家族形態は家族欠損や家族解体によって形成されたものである。

天一国のモデル的家族形態は 3 代が一つの家族関係をなして生きる拡大　家族形態である。１１）祖父母、父母、子女の 3 代圏が 4 大心情圏、すなわち、子女の心情圏、兄弟姉妹の心情圏、夫婦の心情圏、父母の心情圏のなかで相互依存的な授受作用を通して家族関係の真の愛を育みながら、各自自分の位置の格位を守るようになる。家族成員が真の愛を中心とした授受作用と共に自分の存在の位置を守るようになれば、睦まじい家族関係が形成され家庭の安定と発展が可能になる。授受作用とは、一つの家族成員が他の家族成員に真の愛を投入することを意味し、投入を受ける位置にいる人と投入する人との関係における、真の愛の産出として表現される。フィードバックは、家族関係において互いの関係を確認することから自然に成されるようになる。このような家族は家族体系の全体性を成して、独立した代表的家族関係を形成するようになるのである。

天一国のモデル的家族構造の根源は神様であり、相似法則によって家族構造は神様の構造に似るようになる。１２）統一思想によると、神様の本性相と本形状が相対的関係を結ぶと授受作用が起きるが、一定の共通要素を中心として相対基準が作られる。神様における共通要素は心情または創造目的であり、授受作用はその結果を生むようになる。すなわち、神様が心情を中心として性相と形状が主体と対象をなして授受作用をするようになれば、中心－性相－形状－結果の 4 つの要素が関連して、この 4 種類の要素の相

互関係は、位置の関係として設定される。１３）このような授受作用が起こる４つの位置の基盤を四位基台といい、神様に似せて造られた人間と家族関係を含めたすべての存在の類型は例外なく四位基台の基盤で成される。この四位基台は正分合作用による３段階原則の根本となる。これを図表で現せば図 1-1 と 1-2 になる。

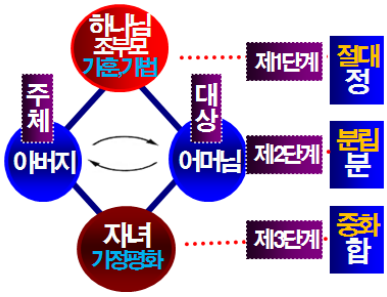

図 1-1　授受作用と四位基台　　図 1-2　授受作用と四位基台及び正分合作用から見た家族構造

統一思想によると、四位基台は正分合作用による神、父母、子女の３段階として完成されるので、３段階原則の根本となる。１４）四位基台と正分合作用の関係において四位基台は授受作用の空間的把握であり、正分合作用は時間的理解である言う。統一思想は、神様の構造においては時空を超越した世界なので、空間的概念と時間的概念が統一性として存在するという。したがって、神様の世界を時間観念で類推すれば、過去、現在、未来が現在に合わさっているのである。まるで映画のフィルムの中に過去、現在、未来がすべて入っているのと同じである。すなわち、時間も現在の瞬間の中に合わさっているので、瞬間の中に永遠があり、瞬間とは、時間が永遠に続いているのである。したがって神様の世界は瞬間と永遠が同じである。空間も位置がない。したがって前後、左右、上下がない。また内外、広狭、遠近もなく、三角形、四角形などの空間もない。無限大と無限小が同じ世界であり、すべての空間が一つの点にすべて重なっている多重畳の世界である。宇宙がどんなに広大無辺で複雑であったとしても、時空と現象を支配している基本原理は神様の統一性にあると言う。１５）この統一性が授受作用の原理であり、家族関係を含めた多様な人間関係の愛の原理であると説明している。

言いかえれば、天一国の家族構造の形態は、授受作用の基盤である四位基台の一点（神様の原点）から家族構造の空間が展開されるのである。正分合作用という神様の原点から時間が展開され、祖父母（過去）、父母（現在）、子女（未来）の３世代の形態を備えた４大愛権が統一された家族構造で形成されることができるのである。したがって３世代の構造で構成される家族構造は神様の姿に似た形態として、モデル的な理想家族構造である。このような３世代で構成された家族構造を拡大家族と称する。拡大家族の構造の中には４大心情圏をまんべんなく経験し、体恤できる関係が作られる。子女たちは祖父母、父母の愛（上から下への愛、慈愛）を受けながら子女の愛（下から上への愛、孝）を体恤するようになり、成長過程を通じて兄弟姉妹の関係から兄弟姉妹の愛を体恤する

ことができる。出生家族関係で十分な子女の愛、兄弟姉妹の愛を体恤して成熟したあとに結婚する適齢期になれば、生殖家族として分家するようになる。結婚した夫婦になれば、夫婦愛（横的愛）をよく交わし、子女を出産することで父母となり、孫や孫娘が生まれてくることによって祖父母となって、世代保存を続けていくようになるのである。このような天一国における拡大家族の形態は今日、多様な形態の家族から生じる多くの問題を補完し、治癒することのできる代案としての家族構造形態である。例えば多様な家族形態、すなわち、片親家族、未婚母家族、同性愛家族、同棲夫婦家族の中で成長する青少年たちにおいて精神分裂症の増加や犯罪率増加が目立ち、持続的な満足を得ることができないという傾向にある。彼らは青少年時期において習得される性的衝動の自制力を持つのが難しく、婚前性行為に安易に陥りやすいなどの問題が内在された家族構造の形態である。家族研究機関によると、多くの障害の主な要素と相関関係があると報告している。１６）また同棲夫婦が婚姻夫婦より離婚率がはるかに高く、夫婦間における満足度が低いと言われている。１７）

このように多様な家族形態構成員の家族関係において、個人の情緒、身体、経済問題だけでなく家族関係、子女教育の問題などが発生する原因は、モデル的家族構造である 3 代圏と 4 大心情圏の家族愛の関係が築かれていない点にある。3 代圏と 4 大心情圏の家族構造は、必ず四位基台を土台としてなされ得る家族構造形態であり、四位基台の土台をなす作用は、授受作用によってのみ可能である。授受作用の特徴は円満性、調和性と円滑性であるので、授受作用が起こる正分合作用と四位基台、すなわち 3 代圏と 4 大心情圏をなした家族構造のなかでは矛盾や対立、相衝のような現象が起こり得ないためである。

2. 真の愛の価値

家族関係や他の社会集団のなかで、真の愛は規範的である。規範とは「当然しなければならない」という当為性を持つ。規範とは、してもしなくてもいいという選択事項ではない。真の愛が規範的というのは、家族関係や社会関係で当然互いに愛さなければならないという意味である。特に、家族関係は血縁関係で結ばれた宿命的関係である。このような関係の根拠は神様と人間の関係に見ることが出来る。１８）創造主であられる神様と被造物である人間の関係は、永遠の宿命的関係である「父子の関係」で結ばれた縁である。「相似法則」によって、人間は祝福結婚した夫婦が子女を生むようになれば、神様と人間の関係のように宿命的な父子関係となる。宿命的関係とは絶つことも、裏切ることも、否定することも出来ない関係ということである。１９）

家族関係において真の愛の根源は神様であられる。無形の神様の真の愛は、家族体系内の家族関係において 3 代圏と 4 大心情圏にあらわれるようになる。天一国の家族構造として祖父母、父母、子女から構成された 3 代圏と 4 大心情圏とは、神様を中心軸として四位基台を形成し、各格位で各自が三対象目的をなすことにより、12 種類の真の愛の

方向が形成され、家族関係の多様な愛の種類を経験するようになる。２０）このような多様な愛の形態として現れる真の愛の根が神様なのである。
神様の真の愛の属性は絶対・唯一・不変・永遠であるために、神様の真の愛の分性体として現れた家族関係の真の愛もまた、絶対・唯一・不変・永遠なる愛であることを否定できない。父母が子女を愛する父母の愛は、上から下への愛であり絶対・唯一・不変・永遠なる性質を持つ愛である。夫婦の愛、すなわち夫と妻の関係において、夫婦の双方向に交わされる横的な愛の関係も、絶対・唯一・不変・永遠な愛の性質から逃れることができない。また異なる形態の横的愛の兄弟姉妹関係でなされる愛の性質も、同じように絶対・唯一・不変・永遠な性質であり、最後の領域の子女の愛、すなわち、下から上への愛である孝の愛の性質も、言うまでもなく父母に向かう絶対・唯一・不変・永遠な愛の性質である。
家族関係の４大愛圏において、私たちが必ず知って実践しなければならない真の愛の２種類の領域がある。一つ目の領域は、絶対に分けてはならない性的愛の領域である。それは夫婦関係の性的愛であり、1%も夫婦以外の別の家族関係や家族以外の人との関係において絶対に分け合うことのできない愛である。夫婦愛の領域でのみ性関係が許された関係であるからである。2 つ目の領域はその他の家族関係、すなわち、子女の愛、兄弟姉妹の愛、そして父母の愛における領域であり、多くの人と愛を分かち合うほど愛の領域を拡大することができる。言いかえれば、父母の愛、兄弟姉妹の愛、子女の愛が拡大されれば博愛主義的な愛なのである。社会科学者たちはこのような愛を利他主義と言う。他人の福祉増進のための非利己的な行動と他人に対する私心のない関心を指し示す。
天一国家族関係では正にこのような利他主義的な愛を家族に期待する。家族領域ではない他の脈絡での利他主義は、注目と称賛を受けるようになるが、家族関係ではむしろ利他主義が欠如されるときに注目されるようになり、考慮の対象として関心が注がれる。
家族体系では、個体目的と全体目的が共存しながら家族関係が利他主義的な真の愛に発展する。自分自身の存在目的に無関心な個人は、やがて他人の福祉に寄与する能力がなくなるからである。しかし個体目的が全体目的をなすための前提目的であることを忘れてはならず、家族体系の機能を最もよく維持するためには個体目的と全体目的の間の均衡が必要である。均衡というのは、両者間の同一な量を意味するのではなく、個体目的は全体目的のための個体目的になってこそ均衡をなすようになる。家族体系において、全体的に統合的な家族関係をなして家族の安定と発展のためには、個体目的より全体目的がより　重要であると強調される。
家族関係において最も必要な愛は、神様の愛に最もよく似た父母の犠牲的な真の愛である。父母の犠牲は契約的な義務がなく無条件的に与えられる。このような犠牲的愛を贈与という。２１）贈与は報償を期待せず愛して投入することである。統合的な体系が当然あるべき方向に作用しているとき、すべての家族構成員は授受法則に従って与える者になると同時に受ける者となるのである。父母が犠牲的に子女を養育した後に、父母が

老いたとき、子女が高齢の父母の世話をするならば、それは統合的家族体系の良い例である。愛によって与えられる自発的な贈与は、惜しみながら与える非自発的な贈与より家族関係の統合的な力が大きい。外出した父母を驚かせようと家の中の清掃をする子供たちは、父母が罰を与えるからと言って清掃をする子供たちより、父母に対する愛と統合的感情をより多く感じるようになる。このような孝誠心は、すべての愛の根本であり出発点となる。孝は兄弟姉妹の愛、夫婦の愛、父母の愛として成長するための基本的な愛の行為なので、真の愛の価値観教育において最も土台となる。しかしながら真の愛とは、一方通行的なものではなく、授受作用による四位基台を土台にして成されるものであるために、四大心情圏が統合的に作用するとき、すべての真の愛の領域が成長・発展するのである。
家族関係の絶対・唯一・不変・永遠な愛の性質を 3 代圏と 4 大心情圏から統合的に発展させようとすれば、真の愛の要素が作用しなければならないということを確認することができる。①対象指向的であり全体指向的なもの、相手や全体の生活を保存し、成長と発達を促進し、相手の価値を実現するように目標をもつこと。②行動指向的なもの、認識よりは実践に移して奉仕に優先的強調をおくこと。③無条件的なもの。④持続的なものである。

真の愛は対象指向的であり、全体指向的である
対象指向的であり、全体指向的とは、利他主義的な注意深い愛を意味する。家族成員を支えるというのは、授受作用に参加した家族全てに利益になる行動から、極端には自己の損害を通して家族に奉仕することまでを含む。家族に対する相対指向的、全体指向的とは家族のために犠牲になることを内包する。家族愛における犠牲の意味は、養育的な奉仕のための犠牲はもちろん、愛を動機とする自発的な贈与である。したがって、与える立場に剥奪感や苦痛が残されるのではなく、喜びが残されるのである。真の愛により生じる犠牲は、与える人をより豊かにする。与える行為が剥奪感を感じるのではなく、自分が生きて成長していることを感じるのである。また、犠牲には相手の要求を認める謙遜が必要である。これは授受作用において相互依存性と相互的支持が望ましいということを認めることである。このような支持は、幼い子どもからも学ぶことができる姿勢であり、子供の勇気を培ってあげる機会でもある。真の愛の力は、夫婦関係において、互いの弱さと強さを補い合い、水平を保ちながら、共に成長する機会と見なして喜ぶ関係として現れる。犠牲的愛とは、たとえ忙しかったとしても何度も繰り返される年老いた祖父母の話を根気よく聞いてあげる父母の姿や子女の姿にも見ることができる。対象指向的、全体主義的な真の愛への報償は自ら努力しただけ比例するようになる。それは感謝による愛と共有された経験、また犠牲の共有から出てきた愛であるためである。

真の愛は行動指向的である

認識的な愛は、行動と実践を通じた愛に比べて崩れやすい。家族関係において、愛の行為の実践的で共有された経験が親密感をより作ってくれる。家庭における実践的な行為とは、赤ちゃんのおむつを替えてあげ、お風呂に入れてあげ、食べさせてあげ、料理してあげ、後片付けを手伝ってあげ、清掃してあげるなど、日常的な生活を送るうえで必須であり、あまりにも当然で平凡な行動が含まれる。人間は自ら愛することによって愛を学ぶのであり、愛を受けることで愛を学ぶのではない。
仮に子女たちが、父母の愛に報いて奉仕する機会を持てないまま成長するならば、また常に世話を受ける側にだけいるならば、子女たちは愛を与えることは学べずに受けることだけ学ぶことになる。愛の実践には、与えられる愛を認めて感謝することこそが重要である。与えられることに感謝する行為は、家族愛の統合的な力を形成するのに非常に重要な力を持っている。犠牲が受ける側より与える側の結束感をさらに増進させるように、相手から受けた奉仕と愛に対する感謝の言葉は、与える人と受ける人の間の関係結束力を増進させる。感謝の表現は、等価性交換で結ばれた紐帯関係ではなく、「交換」が同等でないことを認める紐帯を形成することである。感謝する心を持った人は、積極的に与える人であるという研究報告がある。

真の愛は無条件的だ
無条件的な愛は、愛の関係が自分自身の利益を満足させることに関心を示さない。無条件的な愛は、愛が放縦的または許容的であるという意味ではない。無条件的な愛は、必ず相手のための愛であり、相手の成長と価値を実現するのに必要なもので、それに敏感に対処することである。無条件的な愛とは、相手が愛を受ける価値があると判断されるどうかに関係なく、相手を保護し成長させるのである。

真の愛は持続的だ
家族関係は何より持続的な愛の関係であることを知らなければならない。家族成員を互いに結びつける紐帯感は血縁関係と親族関係という点で未来に拡張して行く持続的な愛であるという点を認識しなければならない。血縁関係というのは、未来だけでなく過去までも、現在に結びつける連結の輪である。このような連続性のために、人類には家族紐帯の連続性がさらに必要である。家族紐帯の拡張が親族であり、親族紐帯の拡張が氏族、民族、さらには国家圏、世界圏、天宙圏まで拡張される。したがって、神様の一つの血統に連結された人類大家族という概念が出てくることができるのである。
すべての人間関係が真の愛の属性を持った絶対・唯一・不変・永遠なものであることを願うのが人間の属性であることが明確であるならば、一時的な人間関係を提案して計画し、目標を立てるのは、はじめから永続的な人間関係を妨害して相衝することであるに違いない。家族関係における真の愛の価値は、必然的であり、根源的であり、結果的な要素として、家族関係を統合的に結束させる働きをする。したがって真の愛で結束され

た家族関係を社会関係に拡大適用すれば社会の諸般の問題を予防して治療できるのである。

3. 家族規範としての規則

家族規範とは、人間自身の人格完成と人間関係に関連して期待される道徳的・倫理的行為、すなわち人間徳目の絶対的基準であり、案内であり、理由と方法である。家族規範は、人間が個性真理体と連体として愛を実践するとき、道徳的・倫理的価値（徳目）を実現するための基本原理である。道徳的・倫理的徳目は、人格体を具現化するうえでの必須的な前提条件である。

統一思想で言う規範は、上述したように、時代と場所によって宗教的・　思想的・文化的に変化する相対的価値主義に立脚した規範とは、たしかに区別される。これは時代と場所を超越した絶対的価値の根本法則であり、個人的な行為において任意的な選択条件ではない、必須条件としての性格が規定される。規範は、「必ず行わなければならない行為」と「決して行ってはいけない行為」を絶対的原理により人間行為の基準を設定してくれる。これは人間が正しく生きていく道を案内し、道徳的原理に従わなければならない理由を提示し、普遍的な善を具現する方法を提供してくれる。

規範を逸脱した行為は価値的実践要目になれず、それは究極的に真の愛の実践ではないと規定する。また、道徳・倫理的徳目には、縦的徳目、横的徳目、個別的徳目などがある。社会集団に対する愛着は、心情機能で理解することができ、自律性を持った規範精神として理解することができる。規範が絶対的法則をいうために、単に法的であり、公式的なものであるので、真の愛の実践を排除したまま規範をあまりにも強調すれば、むしろ有害であったり、心を傷める可能性がある。このような脈絡から見るとき、規範は必ず心情を中心とした真の愛と共に調和を成して守られなければならない。

規範は、個人の人格完成と調和した人間関係を成長させるために、どのように生きることが正しい道なのか、方法を提供してくれる。それだけでなく、人間の内在的価値法則として、個人の人格完成と調和を成した人間関係を維持するための機能を遂行したりもする。結局、善行は誰かが命令して行うのではなく、人間自身の価値追求や、それを実現するための内的衝動によって成されるためである。しかしながら現実の人間は、堕落によって内在的な法を自ら無視するだけでなく、外部の勧誘によってさえも実践しなくなった。家族体系において、家族構成員はこのような規範を順守するように、各自の心情を啓発して発展させる事に留意しなければならない。

家族体系において、規範に従う家族規則は、２種類の形態に分類される。第一は社会規則として、家族の行動を奨励したり、禁止する一種の信念的な規則である。価値法則としての規範は、当為的に家族によって独特に作られていて、その家族にだけ適用され、世代に伝授される家庭的規範による規則がある。それは家族関係の資源管理を調整し、規制して、家族が決定する規則を実行するのであり、規則違反の時、これを処理する方

法を明確にするようにする。例えば、家族の経済管理は誰が担当し、小遣いはいくらずつ配分し、食事する際に食卓に座る祖父母の席、父母の席、子女の席を固定させたり、大人が先に箸を取って食事を始めてこそ、その他の家族成員たちが食事をすることができる、ある人と親密に過ごしたり距離を置かなければならない、人々に親切しなければならない、誰かが呼び鈴を押したときに寝巻を着て出てはいけない、などということである。

第二の形態は内的規範的な規則である。これは規範的信念と一致しない行動を統制し、諭すことである。内的規範的な規則は、家族の行動類型を観察することによって推論することができる。内的規範的な規則は、個人の行動方式を調節する内的規則である。例えば、母が疲れて職場から帰宅したとき、清潔さと責任感、また真の愛に価値をおく内的規範的な規則と、独立性、自律性に価値をおく内的規範的な規則によっては、一連の反応が異なるはずである。内的規範的な規則は他の家族を助ける無数の新しい方法を可能にするので、規則連鎖に対して理解すれば助けになる。家族の内の多くの規則連鎖は健康で機能的になることができる。例えば、朝５時の訓読会のために祖父母と父母がもうすこし早く起きて神様に祈って訓読会の準備をするようになれば、子女たちも起きて祖父母と父母にあいさつとキスをして一緒に訓読会に参加する。そのように３代圏と４大愛圏で互いに愛情表示をする家族は、この規則に従うとき、他の規則の循環として、祖父母、父母と子女が和睦すること、互いに耳を傾けること、互いのために気遣うことのように、規則の循環が始まることができる。

しかし、規則が家族の発達段階に適切ではないときや、あまりにも硬直化されているとき、そして逆機能的であるときは、融通性を持つほうが助けになる。ここで規則は暗黙的であるほど良い。家族領域は複雑で親密な体系なので、多くの規則を展開しようとすれば、むしろ機能が麻痺してしまうかもしれない。明示的に規則を立てるのは、より公的な領域で公式化するのが良くて、家族領域で公式的な規則方法は、逆機能的かもしれない。家族は暗黙的で感情が楽なとき、規則が作動されるためである。

4. 家族の機能

産業社会を経て情報化社会に急速に変化・発展しながら家族の機能も大きな変化を経験するようになり、家庭の固有の機能と基礎的機能が喪失されていることが家族学者たちの研究を通して明らかになっている。しかしながら現代社会において、家族の機能喪失が、家族の解体や弱化された現象をもたらすよりはむしろ、家族が最も重要な基本組織として残るようになるだけではなく、家族の機能を再び回復しなければならない時代的要請を認識するようになった。それは社会の他のどの体系でも遂行することのできない機能を家族体系が遂行することにより、むしろ家族機能の専門性を増していくということである。２３）子供たちが成長して合理的な社会で活動するようになったとき、社会の要求に適応していく心理的・情緒的・社会的機構と人間性の基礎を固める社会化が、

家族が遂行する基礎的機能であるためである。また、家族は能力に関係なく自分を受け入れて、安定と休息を取って再充電をすることができる所でもある。
家族機能は、大きく家族対内機能と家族対外機能に分けられる。まず家族対内機能とは、家族が構成員個々人に及ぶ作用として価値観樹立、性、愛、子女繁殖、養育、財貨の生産と消費、教育、保護、休息、娯楽の側面で遂行する機能である。家族対外機能とは、家族が社会全体に対して遂行する機能、すなわち、性的な統制、種族保存と社会構成員の補充、労働力提供、生活保障、経済的秩序維持、文化享有、社会安定を維持させる機能などを含む。
家族は家族構成員の中心となる夫婦が性生活を営み、性的欲求を満たすことによって、愛、生命、血統を存続させるという、絶対・唯一で重要な機能をなしている。他の社会の機能が家族生殖の機能を代理したり委任することはできない。家族が持つ生殖機能は、対外的に国家、世界の人口を形成して社会構成員を満足させ、社会と歴史発展と人類存続に大きく寄与している。また、家族対内的に生産と消費の機能を挙げることができ、家族対外的には労働力の提供と生活保障の機能を満たしている。家族が賃金獲得によって生活必需品を購入するという意味で、形態を変えた生産機能をしている。消費機能として家族が生活物資を消費する機能をいうが、現代の家族は消費共同体として、消費機能の比重が高いために社会経済成長にも大きな影響を及ぼしている。教育機能と養育機能として子女たちが社会に適応していくために必要な価値観、倫理、道徳、知識、技術などを家族の中で遂行するが、知識と技術が高度に発達したため、家庭外の二次的な教育集団として学校と社会で教育が普及されている。しかしながら、家族の機能がなくなったのではなく、技術と情報の高度化・複雑化に従って、むしろ家族による教育の必要性が増大している。
家族の保護的機能は、疾病、傷害のような外的危険から家族構成員と財産を保護することである。今日、疾病は多様なだけではなく危険度が増加の一方にある。そのために匿名的・大衆的な社会生活の中で、精神疾患の侵害が深刻なので、家族の保護的機能もまた非常に重要である。休息の機能は、家族構成員が心身の緊張や労働の回復を図る機能をいう。現代社会は都市化、産業化、大衆化の複雑な状況で生活しているために、心身の緊張と疲労が目に見えて増加し、これを予防して治療するためには、安定した暖かい家族の雰囲気で休むことがより必要になった。家族の余暇生活や娯楽生活が家族構成員の緊張を和らげ、仕事に活力要素を吹き込む再充電機能をなしていたが、テレビの非倫理的な娯楽性がむしろ健全な娯楽の機能を脅かす要因になりもする。
宗教的機能は、家族の信仰的な意識と態度を育てながら神様に仕え生活する機能である。家族は、神様の神相と神性に似て、神様の愛が実体として具現化されている天宙の縮小体であり、霊界と肉界の媒介体であり、自然環境のすべての森羅万象を主管・管理する基本単位である。２４）したがって、家族の機能で最も基礎的で重要な機能は、縦的真の父母であられる神様と横的真のご父母様に仕えて生活する機能である。２５）

5. 世代保存

人間の誕生は、最も価値ある存在を創造するという意味で最も重要な事件である。これはまた立派で、重要で、強力な新しい世代を創造することである。世代とは、父母と子女をつなぐ連結の輪であり、父母、子女と関連した父方のおば、母方のおば、叔父、いとこ等の親族、さらには氏族、民族、国家、世界に拡張され、包括される。世代の過程は神様の伝統、様式、価値観、天法、生活様式などに人々がどのようにつながるのか、包括することである。家族生活のすべてが世代過程から成長して、この過程の上で形成される。世代過程は家族を通して存在するので、家族領域の固有な部分である。世代過程は私たちが学び、対処して行く環境をどのように活用するのかということ、愛、価値観、親密感、憎悪、闘争、人生全般に対する態度だけでなく、人間、政治、経済、社会、教育などに対する私たちの態度に影響力を行使する。

世代過程が重要な理由は、第一に、世代過程は固定されたものであり、譲渡不可能なものであり、逃避することもできず、取り消すこともできないからである。父母が、自身が生んだ子女に対する父子関係の血統関係がそうである。第二に、幼児期や児童期は人生の最も基礎から始まりながら、父母に全面的に依存するために、世代過程は、私たちが誰であり、何と連結されていて、何が私たちに重要であるかに対する深層的な感情と連結されているためである。第三に、血統は、永遠に変わりがないためである。金氏の血統は、永遠に金氏の遺伝子を持って生きていくようになっている。

文鮮明先生は、神様と人間の関係が父子の血統関係であり、人間の世代過程と同じだと説明している。父子関係の特性は、真の愛、真の生命、真の血統の関係であるということである。神様の血筋の中には真の愛の種が入っていて、真の生命の体が生きており、この血筋と連結されれば人格完成が可能であり、理想家庭も生まれて、神様の祖国である理想国家も出現すると説いている。しかし人間の堕落によって、このような神様の血筋が、サタンの所有権に転落してしまったと強調する。続いて文先生は、「人間がサタンの血統から逃れて神様に似た姿になろうとすれば、交叉・交替祝福に参与してサタンの血統の種を神様の血統に変えなければならない（血統転換）」と警告している。２７）

世代過程が重要なために、文鮮明先生が警告した内容に従って文先生（文先生ご夫妻または代理者）が主礼する祝福結婚式に参加して、夫婦が創造本然の神様の血統に転換した本然の人生を営み、新しい生命を創造しなければならないということである。人間の身体的特性は、一つの世代から次世代に遺伝子を通じて伝授される。このような特性は、感情的・知能的・発達的・相互的・経験的な影響力を持つようになる。健康な世代過程は、家族体系内で、立派で生産的な結果をたくさん創出するようになる反面、病理的な世代過程は、家族に深刻な問題を引き起こす。健康な世代過程は、拘束感のない結束感、圧迫感のない親密感、自我意識を提供する生産的な結果を創出する。これは、愛、安全感、自信感を形成するうえで役立ち、人生の意味と目的意識を持つのに寄与する。しか

しながら病理的な世代過程は、破壊的な傾向を持つ。これは関係を歪曲させて、多くの形態の虐待を誘発する。健康を傷つけて、結婚生活を破壊し、児童の健康な発達を阻害したりもする。
望ましい世代過程の保存は、世代を超えて伝達される内容が望ましいものでなければならない。神様に仕えて神様に似るために生活する人々は、人生の目標と方向が明確で、人生の価値、感情、意志そして態度を父母の世代から学習する。互いに信頼し、愛し、奉仕し、支持し、意志疎通をする方式をよく知って、天法に従って生活する方式を学習する。そして彼らは、絶対「性」を守り、純潔と貞節をもとに夫婦が結束して子供と老人の世話を行うのが彼らの人生の目標であり、喜びであることを学習する。このような学習は、家族から獲得するようになる。彼らは、祖父母、父母、子女、孫息子、孫娘たちと一生をかけて、絶対・唯一・不変・永遠な愛の関係を形成する。このような関係は健康な人生の基礎となる名状しがたい充満感と美しさを招来する。このように健康な伝統、信念、天道、そして関係を結ぶ様式を創ろうと意志を持って努力する人々は、疑うまでもなく、このような考えさえしない人々より、はるかに優れて望ましい人生を営むようになる。体と心が統合され、夫婦が統合され、兄弟姉妹そして親族が統合される伝統、日常慣習の規範を望ましい方式で世代に伝達するとき、世代間に健康で望ましい保存が可能となる。

Ｖ．家族体系内の成功的家族関係

1．成功的夫婦関係

家族体系内の家族関係で最も中心となる家族関係は夫婦関係である。夫婦関係において、夫と妻が共に満足感の均衡をなす人生を営むということは、成功的な結婚生活を意味する。一般的に成功的な結婚とは、結婚の満足と安定性が高く、社会規範と文化的基台に符合し、個人または夫婦相互間に発展と成長が成されている結婚生活であると家族研究家たちは言う。２８）このような成功的な人生は、家族体系内の家族関係において、基礎過程が望ましく行われたためである。夫婦が家族体系内で真の愛を分かちあい、規範的で純潔な人生を営み、夫婦の位置を固く守りながら、夫婦の機能と役割を成功的に遂行することで、子女を生んで世代保存で成功した場合だ。
成功的な結婚の具体的要因には成長してきた家族の背景が挙げられる。父母が幸福で成功的な結婚生活をしてきた場合、子女も結婚して幸福感を経験しやすく、離婚する可能性が少ないという。２９）幼い時期に父母との関係が親密で、受容的で、温情的で、激励する雰囲気の中で成長した場合、子女は円満な結婚生活と対人関係に必要な基本的性品を習得するようになる。したがって、幼い時期に肯定的な経験を多くした人は、成功的な結婚生活をいとなむ傾向がある。これは家族構造で分かるように、父母が祖父母の人生をモデルにして、模倣するように子女は父母の人生を模倣するようになる。そのようにすることで成功的な人生を営むようになるために、健全な家族構造が非常に重要で

あることを知ることができる。
次の要因として、結婚準備が重要だと報告している。３０）結婚前の純潔可否と結婚年齢、そして結婚動機は非常に重要な要因として作用する。結婚する前に異性交際をして、誰かが好きだった経験がある場合、結婚生活において夫婦が和合・統一するのに、多くの支障をもたらす。夫婦が互いに愛するときや、良い事、悪い事、悲しい事が起こるたびに、以前に付き合った人と現在の配偶者を比べるようになり、昔の追憶を思い浮かべるようになる。結局、二つの心で配偶者に接するようになるので、夫婦の統一が難しいのは当然の道理である。夫婦統一において最も基礎的要素は信頼感の形成なので、信頼感に問題が発生する場合には、夫婦の正常な和合と統一は困難である。結婚後の不倫に関しても、過去に性経験を持つ者が、未経験者より不倫の可能性が高いと報告されている。
結婚する当事者の年齢と成熟度は夫婦関係の安定性に影響を与え、早婚する人は、結婚生活においてより多くの問題を経験し、結婚に失敗する可能性が高い。それは教育機会の制限による教育水準の低さ、望む職業に就くことができない、低所得、父母になることの準備不足、情緒的未熟、自我認識の欠乏、個人的発達の課題の成就不足などが問題になるのである。３１）
反面、相手を幸せにしてあげようと準備し、結婚動機として作用したとき、結婚に成功する場合が多い。しかし相手を通じて自分が幸福になろうという心は、相手が期待したものより不足であったり、失望させるたびに不満はさらに大きくなり、成功的な結婚生活を送るうえで困難が生じる。真の愛とは、愛の方向が自分に向かうのではなく、相手に向かうために、真の愛によって愛する準備ができたならば、良い結婚の動機となる。しかし結婚を一種の逃避先や、孤独の解消、父母に対する挑戦の手段、または交換される金銭や商品価値などを優先して配偶者を選んだときには、結婚生活に失敗する可能性が高い。恋愛して結婚した夫婦より、父母が仲介して結婚した場合が成功的な結婚生活を営むと報告している。３２）恋愛する当時には、相手を見る視覚が主観的で一方向・断片的であるが、第三者が相手を評価するときは、主観的視覚よりは客観的視覚と立体的・多面的方向から相手の様子をうかがうことができるからである。
そのような面で、交叉・交替祝福は、文鮮明先生が立体的だけではなく霊的に透視する見識から配偶者の選定がなされていて、最も信頼性のある配偶者の選択方法であるといえる。臨床の事例から見ても、結婚に成功する必須要件は、上述したように、家族体系内で基礎的過程のモデル的家族構造の形態の中で真の愛の価値を学びながら実践して、純潔の規範に従って成熟し、準備された交叉・交替祝福結婚を行い、夫婦が自己の存在位置と役割をよく行うことによって、世代保存に成功するのである。

2. 子女と家族関係
子女は家族体系内で、兄弟や祖父母より、父母とより密接な関係を結び、父母が経験す

る情緒的反応と満足を中心に似ていく傾向にある。
子女の父母に対する思いは、家族の心理的環境と意志疎通の程度、または父母の養育態度に依って差が生じる。家族構成員が互いに意思疎通が多い場合、子女は父母をはじめとして家族間の葛藤を少なく感じ、家族や父母に対する愛着と親密感が高い。
それと異なり、家族成員間の関係が無関心だったり、冷淡な場合、父母が厳しかったり、あまりにも放任的な養育態度であるとき、または溺愛的であったり、一貫性がない態度や、拒否的であるとき、青少年時期にいる子女の葛藤水準と問題行動の頻度が高い。攻撃性が高い非行青少年たちは、特に、父に対して否定的に感じる。すなわち、父の子女に対する拒否的･敵対的な態度、そして愛情と激励、面倒の不足に対して不満を感じる。結局、真の愛を中心とした授受作用が円満に作用して、規範に従った規則をよく順守する家族構造内の子女たちが、成功的な家族生活をするようになる。３３）
父母の円満な結婚生活において、子女たちは満足感を感じるが、父母の再婚や離婚に対しては敏感に反応して、息子より娘がより鋭敏な反応と葛藤を体験する。母親が就業した場合、専門技術職に従事する母親の子女は不安水準が高く、母親が愛情的養育行動を高く意識する場合に、子女が父母に対する愛情をより多く感じる傾向がある。しかし、家庭の暮らし向きや子女の個性、素質などを考慮しない無条件的な進学中心の父母教育熱と、特に、子女教育において父親の関わりが少ない場合、子女が父母との関係や家族生活において圧迫感や緊張、葛藤、不満などを感じる可能性が高くなる。

3. 老人と家族関係

老人は、家族関係と個人的特性に従って家族生活の満足を含めた安定感と生活満足度に影響される。成人子女の愛情的・情緒的支援は、道具的・経済的扶養に比べて、老人の満足度に大きく影響を与え、老人が感じる家族との葛藤は、情緒的次元と価値観の次元での葛藤である。この葛藤が財政的な次元の　　葛藤よりさらに大きいという。
老人の家庭内での役割の依存的な地位は、老人自身の自我概念と満足度に否定的な影響を及ぼす。老人の依存性増加により、子女と同居する場合、家族との葛藤、緊張を経験する事例が多い。伝統や情緒的紐帯感のために子女と同居する場合は満足度が高い。そして女性老人が家庭内で自分が重要な人だと自身の地位を評価するほど、家庭内での意志決定権が高く、満足度が高い。
配偶者との良い関係は、老人の満足と士気に肯定的な影響を及ぼす。配偶者と同居する女性老人は、配偶者がない女性老人に比べて満足度が高い傾向を見せている。３４）女性老人が男性老人に比べて成人子女と、より強い愛情的紐帯関係を結ぶという。しかし子女との関係の質や嫁との関係も、満足度に重要な変因として作用する。老人の経済状態が満足的であるとき、父母から手厚くされるという心理的満足度が増加する。老人の健康状態も生活満足度に重要な影響を及ぼして、健康状態が良好なほど、より心理的満足感と士気が上がり孤独感が低くなる。また宗教活動を熱心にするほど、満足度が高く、

宗教のない老人に比べて死に対する恐れが少なかったという研究報告がある。３５）
老人の成功的な家族生活においても、家族構造の中で、祖父母が真の愛と規範のモデルになって、子女たちに愛の実践を伝授するとき、子女たちが祖父母に孝を行うようになり、家族関係で肯定的伝統を立てるようになる。万一、家族関係で祖父母の愛がなく、権威が立たないならば、家族体系は葛藤の輪が連続的に続く。祖父母の葛藤が父母に、父母の葛藤が子女へ連鎖的に続く。家族体系は循環的であり、持続的な性質があるためである。

Ⅵ. 終わりに

家庭は社会の基本単位であり、健全な家庭は健全な社会を築くことができる。したがって人間問題と社会問題は家族関係において生じるために、健全な家族関係を形成するならば、健全な家族関係の拡大適用により、健全な社会を築くことができる。
上述したように、家族体系を形成する要素、全体性、相互依存性、格位、投入と産出、そしてフィードバックは、健全な家族関係を形成するための定期的で持続的な基本パターンである。このようなパターンをもとに家族関係の基礎的過程の要素を家族関係で実践して守っていくとき、成功的な結婚生活、子女生活、老人生活が可能であることを論じた。天一国の成功的な家族関係は　3代圏と４大愛圏で構成された拡大家族の家族構造の中で可能である。言いかえれば、祖父母、父母、子女の3代圏から子女の愛、兄弟姉妹の愛、夫婦の愛、父母の愛の真の愛の価値を実践し、当為性と必然性の規範に従った内的・外的家族規則を順守して、家族の機能を多様に遂行することで伝統的な世代存続が可能となる。ここで強調する点は、授受作用による家族構造であって、家族構成員たちの家族関係で真の愛を中心とした授受作用が円満に成されないかぎり、家族構造は葛藤の輪が絶えないのである。

注

１）文鮮明（2002)。天聖教。p. 2142。
２）統一思想研究院（1993)。統一思想要綱。p.
３）文鮮明（2002)。前掲書。p. 2142。
４）文鮮明（2007)。「平和メッセージⅠ」平和訓経。p. 22。
５）文相喜（2004)。純潔学：純潔学の起源、期待される成果、そして未来の　方向性、博士学位論文
６）文相喜（2004)。上掲書。
７）文鮮明（2007)。「平和メッセージⅡ」平和訓経。成和社。
８）ウェスリーバー　他著（1999)。新しく見る家族関係学。ハウ出版社。p. 39。
９）キムジョンオク　他共著（2001)。新しく見る結婚と家族。ハクチ社。p. 33。
１０）韓国家族学会　編（1999)。家族学。ハウ出版社。p. 114-115。

１１）文鮮明（2007)。「平和メッセージⅡ」。平和訓経。p.46-48。
１２）統一思想研究院（1993)。統一思想要綱。p.77-83。
１３）上掲書。p.87。
１４）上掲書。p.142。
１５）上掲書。p.150-151。
１６）ユヨンジュ　他（2002)。現代結婚と家族。シングァン出版社。p.342。
１７）上掲書。pp.311-315。
１８）文鮮明（2007)。「平和メッセージ1」。平和訓経。p.14。
１９）統一思想研究院（1993)。統一思想要綱。p.
２０）統一思想研究院。前掲書。p.141-142。
２１）ウェスリーバー（1999)。前掲書。p.120。
２２） Hochschild, A. R.(1989). “The Economy of Gratitude.” In D.D. Faranks and E. D. McCarthy (Eds.), The Sociology of Emotions: Original Essays and Research Papers. Greenwich, CT: JAI Press. pp. 95-113.
２３）ユヨンジュ　他（2002)。現代結婚と家族。シングァン出版社。p.55。
２４）文鮮明（2007)。「神様の理想家庭と天一国民の召命的責任」、平和訓経。世界平和統一家庭連合。p.209。
２５）文鮮明（2007)。「天一国は太平聖代の理想天国」、平和訓経。世界平和統一家庭連合。p.85-86。
２６）文鮮明（2007)。「神様の理想家庭と平和理想世界王国Ⅰ」、平和訓経。世界平和統一家庭連合。p.14。
２７）前掲書。p.16-17。
２８）ジョンヒョンスク、ユゲスク共著(2002)。家族関係。シンジョン出版社。p.203-206。
２９）韓国家族学会　編（1999)。前掲書。p.303。
３０）前掲書。p.304。
３１）チェソクボン（1997)。人間関係心理学。テグヒョソンカトリック大学校出版部。p.134。
３２）前掲書。p.306
３３）Bee, H.(1992). The Developing Child(6th ed.). New York: HarperCollins. p. 121.
３４）チョンジェイル　他（1999)。父子家庭の実態と福祉政策。社会福祉開発研究院。p.37。
３５）ジョンギョンヒ　他（1998)。1998 年度　老人生活実態　及び　福祉欲求調査。韓国保健社会研究員。p.45。

参考文献

キムジョンオク　他共著（2001)。新しく見る結婚と家族。ハクチ社。
文相喜（2004)。純潔学:純潔学の起源、期待される成果、そして未来の方向性、博士学位論文
文鮮明（2007)。「平和メッセージⅡ」平和訓経。世界平和統一家庭連合。
文鮮明（2007)。「神様の理想家庭と天一国民の召命的責任」、平和訓経。世界平和統一家庭連合。
文鮮明（2007)。「天一国は太平聖代の理想天国」、平和訓経。世界平和統一家庭連合。
文鮮明（2007)。「神様の理想家庭と平和理想世界王国Ⅰ」、平和訓経。世界平和統一家庭連合。
パクウォンギル（2007)。「モンゴリアン文化の核心価値」、モンゴル斑点同族と世界平和。モンゴル斑点同族世界平和連合編集部。
オクソンファ。チョンミンジャ（2000)。結婚と家族。ハウ出版社。
ウェスリーバー　他著（1999)。新しく見る家族関係学。ハウ出版社。
ユヨンジュ　他（2002)。現代結婚と家族。シングァン出版社。
チョンジェイル　他（1999)。父子家庭の実態と福祉政策。社会福祉開発研究院。
チョンギョンヒ　他（1998)。1998 年度老人生活実態　及び　福祉欲求調査。韓国保健社会研究員。
チョンヒョンスク、ユゲスク共著（2002)。家族関係。シンジョン出版社。
チェソクボン（1997)。人間関係心理学。テグヒョソンカトリック大学校出版部。
統一思想研究院（1993)。『統一思想要綱』。成和社。
韓国家族学会　編（1999)。家族学。ハウ出版社。
Bee, H. (1992). The Developing Child(6thed.). New York: HarperCollinsl.
Burr, W. R, Day, R. D. & Bahr, K. S (1993). Family Science. Brooks/Cole Publishing Company.
Davidson, J. K & Moore, N. B (1992). Marriage and Family. Win. C. BrownPublishers.
Hochschild, A. R. (1989). “The Economy of Gratitude.” In D. D. Faranks and E. D. McCarthy(Eds.), The Sociology of Emotions: Original Essays and Research Papers. Greenwich, CT: JAI Press.